

技術思想としてのアマチュアリズム

— 日本の電気通信技術をめぐる市民参加の歴史社会学 —

研究代表者 飯田 豊 立命館大学 産業社会学部 准教授

1 本研究の背景と目的

「技術史」という学問分野は伝統的に、技術開発に従事する専門家を育成するための教育、すなわち「技術者教育」の一環として発展してきた。たとえば、「機械技術史」は主に機械技術者が身につけておくべき歴史的素養、「土木技術史」は主に土木技術者が身につけておくべき歴史的素養、という具合である。電気通信の技術史もまた、「技術史」の一部であるならば、それは電気技術者や無線技術者、放送技術者、あるいはコンピュータ技術者やプログラム開発者にとって役立つ歴史的素養を意味するのだろうか。

そういう面がないわけではない。しかし、電気通信技術の歴史においては、技術の発展にともなう専門化や標準化の過程と併せて、しばしば〈アマチュア〉の存在が重要な役割を果たしてきた。たとえば、ラジオの黎明期におけるアマチュアの活躍はきわめて重要であり、戦後のアマチュア無線や電子工作は、青少年に人気の高い趣味文化だったと同時に、技術者養成という一面もあった（高橋 2011）。テレビジョンの黎明期にもアマチュアの存在を見出すことができる（飯田 2005）。また、コンピュータやネットワークの発展においては、著名なビジョナリーやアントレプレナーばかりでなく、無数のホビイストやハッカーのコミュニティが重要な役割を果たした（Levy1984=87）。新しい技術をとりまく生産者と消費者のあいだの相互作用、専門家と非専門家のコミュニケーションを、「アマチュア」や「ファン」、「マニア」や「ハッカー」と呼ばれる人びとが仲立ちし、時には発展の仕方を主体的に方向づけてきたこともあった。電気通信技術の発展に関しては、その当事者の裾野がきわめて広いのである。

さまざまな電気通信技術が日常生活のあらゆる領域に浸透している現在においても、技術と人間との望ましい関係をデザインしていくためには、その生産と消費の相互作用、専門家と非専門家を媒介するコミュニケーションが不可欠であろう。しかし今日、技術の専門分化（ブラックボックス化）にともない、そうしたコミュニケーション回路は皆無に等しい。

そこで本研究では、電気通信技術の専門家と非専門家のあいだを媒介する営みの系譜を〈アマチュアリズム〉という概念で束ね、その将来を展望した。本研究の成果は次の通りである。

まず、日本の電気通信技術史のなかで、〈アマチュア〉という概念が定着する過程を明らかにした（=2 節）。そして、電気通信技術の専門家と非専門家の乖離が決定的になるにつれて、〈アマチュア〉という存在の語られ方がどのように変わっていったのかを明らかにした（=3 節）。さらに、こうした〈アマチュア〉に対する解釈の系譜、いわば、技術思想としての〈アマチュアリズム〉の変容を明らかにした（=4 節）。こうした歴史的視座を踏まえて、インターネット時代を生きるわれわれにとって、技術発展の当事者として振る舞うというのは一体どういうことなのか、研究機関や産業資本に対する市民参加のあり方はいかにあるべきか、〈アマチュア〉という概念の柔軟性ととも考察した（=5 節）。

2 〈アマチュア〉の誕生 — 「趣味」の無線電話

1920 年における KDKA 局の誕生が全米に広まり、すぐさま日本にも伝わる一方、国内でも既に無線電話の研究開発は一定の成果を挙げていたことから、民間でも部品が製作されて広く流通していた。1922 年、麹町の本堂平四郎、京橋の濱地常康は、逓信省から正式な許可を得て、それぞれラジオの実験放送を開始している。苫米地貢も同年、自身が主宰する衆立無線研究所から実験放送を開始した。安藤博は早稲田大学在学中に無線通信に没頭し、自宅の六畳間からニューヨーク、シカゴ、ロンドン、ホノルルなどの個人私設局との交信に成功していたことから、「日本のエジソン」「東洋のマルコーニ」などと呼ばれた。

いずれも個人私設局であったことから、彼らは現在「アマチュア無線家」と呼ばれることもあるが、当時からそのように認知されていたわけではない。いずれも逓信省とのつながりが深い実業家で、民間放送の事業化と送受信機の販売を見据えていた。苫米地は 1923 年、ラジオの送受信機を携えて、全国行脚をおこなっている。苫米地の近親者によれば、それは「何がしかの講演料をもらう山師的な商売」だったという（『無線

と実験』1973年5月号)。その他にも、多くの無線実業家が登場し、民間資本による放送局設立を熱望する機運が高まる。

家庭に電気が普及し、交通機関の機械化が進行するなかで、余暇の時間を持ち、ラジオを趣味にできる金銭的余裕のある青少年によって、無線家の裾野が急速に拡大していった。1924年初頭の時点では「無線研究家」「無線愛好家」「素人」などと呼ばれ、「アマチュア」という言葉はまだあまり用いられていない。無線家たちにとっては、むしろ「趣味」という概念のほうが重要であった。新中間層の青少年にとって、洗練された taste にもとづく hobby (神野 1994) として、無線文化は受容されたのである。

1923年9月1日の関東大震災を経て、1924年5月までに放送事業計画の出願をしたものは、全国で64件。ところが、通信省の方針転換によって、事業免許の全申請者は、東京、大阪、名古屋における非営利の社団法人に統合することを命じられ、民間放送の事業化は挫折した。1925年、東京放送局 (JOAK)、大阪放送局 (JOBK)、名古屋放送局 (JOCK) が相次いで開局する。

民間放送の挫折にともない、アメリカとの違いに対する失望=反省も相まって、作動する装置を製作する過程を愉しむことを通じて、青少年に科学技術に対する好奇心を芽生えさせようという啓蒙的な「趣味」教育の機運が高まっていく。苫米地が1924年に出版した『趣味の無線電話』は、何十版もの増刷を重ねるベストセラーとなった (苫米地 1924a)。その背後には、放送の事業化は叶わなかったが、無線雑誌や受信機 (あるいはその部品) の販売などを目的とする、実業家による市場開拓のねらいもあった。そして1925年ごろ、趣味としてのラジオに魅了された富裕層の人びとが、「アマチュア」や「ファン」と呼ばれるようになる。その人口は東京市内だけで1万とも3万とも、あるいは5万とも推測されるが、その定義は非常に曖昧であった。

「アマチュア」という言葉自体は、明治時代から「素人」と同義で注釈なく用いられており、1920年代初頭までには、「アマチュア写真」「アマチュア映画」といった語法も定着していた。だが、無線文化の文脈における「アマチュア」とは、アメリカで民間放送の実現を導いた、理想的な存在という含意があった。放送局の設立を機に、苫米地のような先端的な無線家たちも「アマチュア」を自称するようになった (苫米地・古澤 1925)。

それは本来、無線の事業化と矛盾するものではなかった。「アマチュア」を読者対象とすることが序文で明記されている苫米地の著書には、「無線を副業とする人のために」という章が設けられている。「諸君は、諸君の近隣の人々をリードする立場になる [...] 私は読者諸君が、否半数の人々位は [...] 無線器具提供家となることを、信じて、疑はぬ」 (苫米地 1924b)。

もともと、定時放送の開始とともにラジオの契約者数が爆発的に増加し、受信機が広く普及するにつれて、「アマチュア」たちは次第に、放送の主たる聴取者ではなくなっていく。ラジオを娯楽やニュースを受信する手段とみなす新しい聴取者たちとは、ラジオに期待する役割に埋めがたい断絶があったのである。

そこで、硬直化したラジオに代わる新たな研究対象が模索されるようになる。その選択肢のひとつが、当時、欧米で芽生えつつあったテレビジョン技術であった。もともと、テレビジョン・アマチュアは結局、不透明な技術動向に翻弄されながら受動的な実験活動に甘んじ、活躍の余地を見出すことは難しかった。

第二次世界大戦を経て、アマチュア無線=非営利の私的学究という規範が国際的に成立する。1950年の電波法施行規則は、「アマチュア業務」を「金銭上の利益のためでなく、もっぱら個人的な無線技術の興味によって行う自己訓練、通信及び技術的研究の業務」と規定している。1976年にアマチュア無線連盟が発行した『アマチュア無線のあゆみ』では、この施行規定は「時間を越えて成立すると考える」とされ、アマチュア無線の歴史が過去に遡って修正されている。「大正末期に長、中波の送信の正式免許を持っていた発明研究所 [...] の浜地常康氏、安藤研究所 [...] の安藤博氏は共に営利を目的としていたから、すぐれた先覚者ではあるがアマチュアとはいいがたい」というのである (日本アマチュア無線連盟 1976)。

言い換えれば、「アマチュア」が非営利の私的学究を営む者を意味するのが自明となるのは、戦後になってからのことである。その後、電子工学や情報科学に裏打ちされた情報通信技術の発展にともない、専門家と非専門家は決定的に峻別され、「アマチュア」の意味はさらに大きく変容していく。1969年の『トランジスタ技術』は、「『アマチュア』という言葉の意味するものが大きく変わってきて」おり、「職人芸的技術の積み重ねでは限界がありいつしか作ることをやめ既製品の評論家へと成長？」してしまう「時代の趨勢」を嘆いてみせる。

メディア技術史がこれまで、〈アマチュア〉という存在に注目してきた事由は、時代ごとに大きく異なっていると云わざるをえない。〈アマチュア〉という概念の多義性ゆえに、異なる意味合いの〈アマチュアリズム〉が見出されてしまう。あるときは専門家を「発明」する存在として、あるときは専門家を「育成」する存在として、あるときは専門家を「批判」する存在として、あるときは専門家を「超越」する存在として。それ

ゆえ〈アマチュア〉という概念を同時代的に理解することは、きわめて重要なのである。

3 〈アマチュア〉の変容 —専門家と非専門家の関係性をめぐって

3-1 専門家を「発明」する

さまざまなメディア技術は、「アマチュア」や「好事家」といった人びとの実践や抗争を経て、現代社会に定着している。キャロリン・マーヴィンは、19世紀末のアメリカ社会のなかで、電気雑誌の言説や電気技術のスペクタクル的な展示などを通じて、電気技術者たちが専門性を「発明」していった過程を分析している。それは「誰が技術的な知の内側におり、誰が外側にいるのか、誰が語ることを許され、誰が許されないのか、誰が技術に対して権威を保持し、信用されていくのかといった諸々の点をめぐって折衝がなされていくひとつつながりの抗争の場」であった (Marvin 1988=2003)。このような考え方にもとづいてマーヴィンは、これまでのメディア技術史が、機器の普及に先立つ出来事を軽視してきたことを批判している。

また、吉見俊哉は『「声」の資本主義』のなかで、大正末期のアマチュア無線家はもとより、初期の電話ネットワークを差配した女性交換手や、国家的な電話網が浸透していない戦後日本に普及した有線放送電話の組織者たちを含めて、技術や芸術の専門家 (=送り手) と大衆 (=受け手) の中間に位置するような人びとを、広義の〈アマチュア〉と捉えている。新たに社会化しつつあったメディア技術が、大衆的想像力のもとでいかに受容されていたかということ、吉見は〈アマチュア〉によって構成される文化と関連づけて把握しようとする。こうして「それぞれのメディアを横断する形で作用していた技術的変容の力線」を、現在の状況に直接つながる問題として浮き彫りにしたのである (吉見 1995=2012)。

この本が最初に出版されたのは、「インターネット元年」と呼ばれた 1995 年である。ここで吉見は直接的には言及していないものの、このころから〈アマチュア〉に焦点をあてたメディア技術史はたいいてい、インターネットの行方と重ねあわせて論じられてきた。たとえば、デボラ・ポスカンザーはこの翌年、大正末期のアマチュア無線文化を分析し、80年代以降のサイバースペースにみられた価値観と比較している。「日本におけるラジオ文化の進化は、最近サイバースペースで見られる諸変化とどこか似ている。[...] アマチュアの飽くなきチャレンジと実験、規制への反感、技術的発見と自己発見とのロマンティックな関連などは、ハッカーのサブカルチャーにも見られる典型的な価値観である」(ポスカンザー1996)。

3-2 専門家と非専門家の「乖離」 —電気通信技術のブラックボックス化

もっとも、1910~20年代のアマチュア無線文化と1980年代のハッカー文化を、あらゆる面で同列に論じることにはできない。時代がくだるにしたがって、技術の秘匿が保証される半導体技術の急速な進展にともない、専門家と非専門家は決定的に峻別され、〈アマチュア〉が技術的次元で電気製品の筐体の内部に関与することは次第に困難になっていく。IC(集積回路)やLSI(大規模集積回路)が導入された製品の登場にさいして、もはや電器屋や修理屋、アマチュアが箱の中を覗き込むことは期待されておらず、ごく一般の利用者には、専門家による研究開発の痕跡すら感じられないブラックボックスと化していった。

その反面、モジュール化された部品を組み合わせてコンピュータを自作する人びと、高度なプログラミングを実践する人びと、あるいはアプリケーションを自在に駆使して表現する人びとが増えていった。こうした中で〈アマチュア〉の意味は、大きく変わっていったのである。

70年代以降、マスメディアの専門主義や商業主義がもたらす弊害を批判したり、あるいは地域や社会の問題を市民参加によって解決したりするための手段として、新しいメディア技術を活用する人びとが現れるようになった。たとえば、地域メディアや市民メディア、ビデオアクティビズムやネットアクティビズム、ハッカー文化といった潮流の担い手たちは、希少な専門家集団の限界を踏まえたうえで、従来とは異なるやり方で専門家と非専門家のあいだに介入していったという意味で、いずれも〈アマチュア〉の変奏といえよう。

3-3 「批判」から「協働」へ —メディアリテラシーの転回

イギリスやカナダにおけるマスメディア批判を起源とする、70年代以降の草の根的なメディアリテラシー運動も、こうした動向と結びついていた。かつてラジオの黎明期を跡づけることを通じて、放送の産業化に先立つ〈アマチュア〉の営みを描いた水越伸が、やがて後年、放送の送り手と受け手を結びつけ、表現と受容の循環を引き起こすための実践研究を展開するようになったことは示唆的である。たとえば、水越たちはこれまで、ローカル放送局と地域の子どもたちによる協働的な番組制作の試みを継続的に実施している。専門家が放送の仕事の分かりやすく伝えることが目的ではない。送り手と受け手が番組制作を通じてリテラシーを学び合い、対話の回路を構築することがねらいである(東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編 2005)。こうしてメディアリテラシーは近年、単にマスメディアの情報を批判的に読み解くだけでなく、送り手と受け手のあいだに対話の回路を構築し、表現と受容の循環を再生する市民参加の概念へ

と拡張している。

4 技術思想としての〈アマチュアリズム〉

専門家と非専門家のあいだで知識や技能が大きく乖離していくなかで、その中間に位置する〈アマチュア〉の難しさと、それゆえに重要な存在であるという指摘は、電気通信技術に限らず、さまざまな技術分野で1930年代ごろからみられる。たとえば、園芸を愛好していた思想家の林達夫は、『趣味園芸』という雑誌に1939年、「アマチュアの領域」と題するエッセイを寄稿している。

現代の科学と技術が過去には到底思いも及ばなかった園芸の奇蹟を実現していることは事実だが、アマチュアはその教えと方法を残りになく駆使するという状態には不幸にして置かれていない。そこで多くの制約と不便との内でのさまざまな工夫と実験が物を言う余地が幾らもあるのだ。その工夫苦心をいわば即物的にアマチュアは語るべきだと私は思う。(林1939)

林は、専門家の記述が原則として「一般的、抽象的、概括的、平面的」なのに対して、アマチュアは「殊別的、具体的、個性的、立体的」であることに特色があるという。林の弟子にあたる山口昌男は、こうしてアマチュアの経験を専門家が吸収し、その知識を組織化していくためには、専門家のほうに柔軟性や体系性、思想的な抱擁性が必要になると主張している(山口1963)。

マーシャル・マクルーハンが60年代、メディアが「環境」になることによって、ある時代の現実が形成されるようになると、その影響は意識されなくなってしまうと言っている。そして、「環境」の真の姿を見る力を持っている「反社会的」な存在のひとつとして、〈アマチュア〉を挙げている。

専門家主義(プロフェッショナルリズム)というものは環境的である。アマチュアリズムは反環境的である。専門家主義は、個人を全環境のパターンの中に没入させる。それに対しアマチュアリズムは、個人に対する全体的認識と社会の基本原則に対する批判的認識を育てようとする。(McLuhan and Fiore 1967=2010)

今ある環境に専門家は没入してしまうが、〈アマチュア〉には批判的認識が宿るというのである。こうして専門家/非専門家、送り手/受け手、生産者/消費者のあいだに位置する〈アマチュア〉を肯定的に評価する議論は、80年代の情報社会論やニューメディア論、90年代のマルチメディア論、2000年代のIT社会論やWeb2.0論などでも、繰り返し反復されてきた。たとえば、日本におけるWeb2.0ブームを先導した梅田望夫は、『ウェブ進化論』の中で次のように述べている。

Web2.0の主唱者たちは、アマチュアを崇拜し、プロフェッショナルに不信を抱く。ウィキペディアへの真の礼賛の背後にはそういう思想がある。オープンソースやあまたの民主主義的な創造性発揮例への賛美の背後にそういう思想が見えるのだ。(梅田2006)

一連の議論に共通しているのは、専門家集団の劣化や凋落、信頼性の揺らぎが批判されたうえで、新しい情報通信技術によって、情報の送り手と受け手、市場における表現者と消費者、専門家と非専門家の境界が乗り越えられるという希望が表明されていることである。

5 インターネット時代のアマチュアリズム

もともと、半導体技術の発達にともない、それまであまりにも高価だった電気機器や通信機器、ビデオカメラやコンピュータを、個人が趣味として使うことが可能になったことで、専門家集団の希少性や特権性は、必ずしも問題にならなくなった。

たとえば、80年代に注目されたミニFMは、その先駆けであった。マスメディアとしての放送は、常に受信と送信の立場が固定的で、送信する側に立つのは難しいのに対して、受信するのはきわめて容易である。ミニFMはその関係が完全に逆転しているという意味で、マスメディアに対する批評的な営みと言えなくもない。しかし、従来のローカルメディアが個人の自発性を醸成するよりも、地域活性化の文脈で市民参加を求める傾向が強かったのに対して、ミニFMブームは、現代におけるインターネット上の創作活動に通じる、よ

り自生的なメディアであった。

インターネットという表現の場が広がったことで、専門家／非専門家、送り手／受け手の境界があいまいになり、〈アマチュア〉の裾野が拡大していったように見える。そして近年、インターネット上の創作活動をめぐる議論のなかで頻繁に引き合いに出されるのが、アメリカの未来学者アルビン・トフラーが1980年に提唱した「プロシューマー (prosumer)」という概念である。非マス化（脱画一化）が促される脱産業社会の到来にともない、これまで市場のなかで乖離していた生産者 (producer) と消費者 (consumer) の役割が接近し、生産活動をおこなう消費者の重要性が増していくというのがトフラーの主張であった (Toffler 1980=80)。30年以上の時を経た現在、創作支援のアプリケーション、動画共有サイトやソーシャルメディアなどのプラットフォームが普及し、マッシュアップや二次 (N 次) 創作文化などが生まれたことで、ようやくプロシューマーの存在が現実化してきたというわけである。

ただし、こうした新しい情報環境において、情報や表現の生産者／消費者、あるいはプロ／アマチュアの境界線があいまいになるということと、デザイナー (設計者) / ユーザー (使用者) の関係のありようは区別されなければならない (飯田 2012)。加島卓が指摘するように、一連のプラットフォームにおいては、ユーザーの主体性や能動性をデザイナーが先取りすることで、あらかじめユーザーの自由度もメタにデザインされている。実のところ、専門家／非専門家の関係がリセットされたのではなく、専門家の居場所にズレが生じたとともに、ユーザー自身は想定範囲内 (どこまでもほどほどに) 表現に水路づけられてしまう (加島 2010)。マーヴィンの言葉にならえば、「誰が環境設計の内側におり、誰が外側にいるのか」という重要な問いが、宙吊りになってしまっただけではない。

本研究の助成期間が始まる矢先、東日本大震災が起こった。震災発生から間もなく、支援物資、ボランティア、雇用などを効率的に媒介するマッチングサイトの数々に加えて、支援者の専門性や指向性に応じたオンライン・プロジェクトが数多く立ち上がった。個人的な楽しみとして営まれているインターネット上の表現活動が、非常時においては公益的で利他的な支援活動にシームレスに転化するという事態は、2000年代からたびたび見られていた現象である。かつては地域メディアや市民メディア、ビデオアクティビズムなどの担い手が、マスメディアの限界を踏まえたくて、被災地の情報活動を主体的に支えてきたが、今後はインターネットにおける集合的表現と補完関係を築いていくことが重要であろう。被災地に対する想像力やシンパシーを長くはぐくみ、持続可能な復興支援の道筋を切り開いていくために (飯田 2011)。それには、近代的市民として成熟した主体の形成に向けて人びとを啓蒙するのも、その反対に、未熟で欲望に忠実な動物として捉えて制度設計を施すのでもない、中間的な主体という人間観が重視される (宇野・濱野 2012)。技術思想としての〈アマチュアリズム〉という視座を、こうした現代状況のもとでどのように発展させていくことができるのか、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 林達夫, 1939, 「アマチュアの領域」『趣味園芸』1939年2月号.
- 飯田豊, 2005, 「「放送」以前におけるテレビジョン技術社会史の射程 —昭和初期における公開実験の変容をめぐって」, 『マス・コミュニケーション研究』67号.
- 飯田豊, 2011, 「震災後の地域メディアを IT はエンパワーできるか —道具的文化から表現的文化へ」コンピューターテクノロジー編集部編『IT時代の震災と核被害』インプレスジャパン.
- 飯田豊, 2012, 「「拡張現実の時代」におけるプロシューマー論の射程 —宇野常寛＋濱野智史『希望論 —2010年代の文化と社会』『10+1 web site』2012年6月号.
- 神野由紀, 1994, 『趣味の誕生 —百貨店がつくったテイスト』勁草書房.
- 加島卓, 2010, 「ユーザーフレンドリーな情報デザイン —Design of What?」, 遠藤知巳編『フラット・カルチャー —現代日本の社会学』せりか書房.
- Levy, Steven, 1984, *Hackers: Heroes of the Computer Revolution*. (=1987, 松田信子・古橋芳恵訳『ハッカーズ』工学社.)
- Marvin, C. 1988, *When Old Technologies Were New: Thinking About Electric Communication in the Late Nineteenth Century*. (=2003, 吉見俊哉・水越伸・伊藤昌亮訳『古いメディアが新しくなった時 —一九世紀末社会と電気テクノロジー』新曜社.)
- McLuhan, M. and Fiore, Q., 1967 *The Medium is the Massage: An Inventory of Effects*. (=2010, 南博訳『新装版 メディアはマッサージである』河出書房新社.)
- 日本アマチュア無線連盟編, 1976, 『アマチュア無線のあゆみ』日本アマチュア無線連盟.

- ポスカンザー, デボラ R., 1996, 古賀林幸訳「無線マニアからオーディエンスへ —日本のラジオ黎明期におけるアマチュア文化の衰退と放送文化の台頭」, 水越伸責任編集『20世紀のメディア(1) エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム.
- 高橋雄造, 2011, 『ラジオの歴史 —工作の〈文化〉と電子工業のあゆみ』法政大学出版局.
- Toffler, A. 1980, *The Third Wave*. (=1980, 鈴木健次・櫻井元雄ほか訳『第三の波』日本放送出版協会.)
- 苔米地貢, 1924a, 『趣味の無線電話』誠文堂.
- 苔米地貢, 1924b, 『無線電話機部分品製作と組立法』誠文堂.
- 苔米地貢・古澤恭一郎, 1925, 『放送無線 型式証明受信機取扱法 公認自製機設計組立法 の手引』誠文堂.
- 東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編, 2005, 『メディアリテラシーの道具箱 —テレビを見る・つくる・読む』東京大学出版会.
- 梅田望夫, 2006, 『ウェブ進化論 —本当の大変化はこれから始まる』ちくま新書.
- 宇野常寛・濱野智史, 2012, 『希望論 —2010年代の文化と社会』NHK ブックス.
- 山口昌男, 1963, 「アマチュアの使命」『思想の科学』1963年9月号.
- 吉見俊哉, 1995=2012, 『「声」の資本主義 —電話・ラジオ・蓄音機の社会史』河出文庫.

〈発表資料〉

題名	掲載誌・学会名等	発表年月
震災後の地域メディアをITはエンパワーできるか —道具的的文化から表現的文化へ	『IT時代の震災と核被害』 (インプレス・ジャパン)	2011年12月
「つながり」のメディア史序説 —戦後日本の無線文化における指向性の類型化	『福山大学人間文化学部紀要』 12巻	2012年3月
「拡張現実の時代」におけるプロシューマー論の射程 —宇野常寛+濱野智史『希望論—2010年代の文化と社会』(書評論文)	『10+1 web site (特集: 書物のなかの震災と復興)』(LIXIL 出版) 2012年6月号	2012年6月
マクラーハン、環境芸術、大阪万博 —60年代日本の美術評論におけるマクラーハン受容	『立命館産業社会論集』 48巻4号	2013年3月
メディアを“着脱”することのリテラシー (招待講演)	『デジタル教科書から見える教育の未来』シンポジウム 第2部「モバイル・メディア社会から見える教育の未来」(於:「大阪ユビキタス協創広場 CANVAS」内田洋行大阪支店 未来の学習空間)	2011年5月
初期テレビジョン技術の社会史 —その今日的意義について	立命館大学産業社会学部共同研究会 (於: 立命館大学衣笠キャンパス)	2012年7月
趣味のテレビジョン —技術思想としてのアマチュアリズム	現代風俗研究会「新風俗学教室」 (於: 関東学院大学関内メディアセンター)	2013年5月